
Fate/Tragic night

青い毛布

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

F a t e / T r a g i c n i g h t

【Nコード】

N 5 2 3 9 B A

【作者名】

青い毛布

【あらすじ】

第五次聖杯戦争が完全に終焉を迎えて70年……。名門と言われる全ての家系達の変動も時と共に進んでいく。始まりの御三家と呼ばれる彼等でさえも今では願望の実現を奇跡に頼る事をせず、完全消滅した冬木の聖杯の代わりになるべきモノを探し求め、それぞれに凌ぎを削り、独自のルートを模索していた。そんな時、冬木に現れた新たな聖杯が呼び起こす、魔術師達の抗争、英霊達との日々が再び現代に蘇る。

prologue & episode 1

Prologue

彼の　　または彼女の戦いに、一体どこまでの意味があるかと問われれば閲覧者達は押し黙るだろう。

その戦いに意味はなく、志すべき糧もなく、偶像に理想を重ね合わせる。

力に支配されるべき弱者と虐げられた若者は、行動の終にではなく行動そのものに意味を見出し相果てる。

残された神秘など欠片もなくとも　　偽りに生まれた強者と歩んだ日々はきつと、消えぬ形で心に刻まれたことだろう。

犠牲者かと問われれば彼は首を振る。加害者かと問われれば彼女は頷くだろう。

結局のはじまりは彼が彼であり、彼女が彼女であったが故に、それ故に自覚して罪を行うのだろう。

それこそが、心に刻むべき英霊達との日々なのだから。

Episode 1

1

「平和ボケしたか？」

ソラサキ」

そう言いながらロジャー・ショックリーは片手に遊ばせた長槍を肩に落ち着かせる。

決闘形式の試合を行なっている時計塔で降霊と錬金を学ぶ学生が二人、広さも余りないような中庭の芝生の上でロジャーに圧倒された学生が背をつけて伸びている。

「魔術協会の主催、聖堂教会の監督の下で行われていた、冬木の聖

杯戦争が終焉を迎えて70年近くが経った……僕達は変革を迎えた時代の当主を継ぐ者として、各人、過去に類を見ない程の？力？を求められている」

名門と言われる全ての家系達の変動も時と共に進んでいった。

始まりの御三家と呼ばれる彼等でさえも今では願望の実現を奇跡に頼る事をせず、完全消滅した冬木の聖杯の代わりになるべきモノを探し求め、それぞれに凌ぎを削り、独自のルートを模索していた。

「しかし、旧家とはいえ徐々に廃れを見せ始めたソラサキでは『二極に到達すべき』と天より加護を受けた、このロジャー・シヨックリーに及ぶべきもないのは必然か」

高らかに笑みを浮かべながらも悠々と、自身の端正な顔立ちを見せつけるかのように返事のない空崎へと向ける。

「自慢話は終わったか、ロジャー」

目を開いて空を仰ぎ見るようにしながら仰向けを続けていた空崎が悔し紛れに言い放つ。

「それは皮肉か？ ソラサキ、日本で荒廃を免れないと思われた旧家から君の陰陽の妙を高く買い、時計塔へと招き入れたのは我らシヨックリーではないか……何故にそうも我々を敵視する」

「ッ日本の変則的な魔術が珍しかったから、一匹飼っておきたかっただけだろう！」

起き上がりざまに吐き捨てるように言う。

「君の才能を認めたことは事実だ、ついて来ることを選び取ったのは君じゃないか？」

受け流すが如く優雅に会話を進める。

「チッ……………悪魔の子が」

小さな、相手に届くかも分からないほどの声で空崎は言葉を呟いた。その言葉自体が明確にロジャーに届いたのかは定かではないが、明らかに意味を汲み取った反応を示すロジャー。その正確さは、彼のその言葉に対する過剰なまでの執拗さを感じさせる。

「級友として忠告しよう、次にその言葉を僕の前で口にしようもの

なら 貴様の頭頂部が吹き消えることになるぞ」

先程までとは打って変わったように鋭い眼光を飛ばし、半ば起き上がった空崎の額に長槍の切先を突きつける。

「ふん、まあいい……劣等をひれ伏させる為に僕の力はあるのではない、以後気をつけるように」

そう言つてロジャーは切先を引き下げ、構えを収め、子を嗜めた親のように嘆息を背負つた後ろ姿を向け校内へと去つて行つた。

「……………畜生が」

空崎は誰もいなくなつた中庭に苛立ちを呟く。

2

青く澄み渡つた空の上に、同じ名を持つ空崎一颯が浮かんでいる。吹き渡る風に身を晒し、少しの力もなく、流されるがままに浮遊する姿はまるで風と戯れる空そのものである。

そのまま、一颯は脱力すると急に重力の影響を思い出したかのように地面に向かつて吸い寄せられ、下からの突き上げられる突風に木の葉の如く揺られていた。

落ちる所は決まっている。

決まつていつもの小さな泉だ……一颯は身に纏つた空の属性を水の属性へと変える、自身に宿つた陰陽師の技をもつて、大空を突き抜ける風になり、泉に巣くう水となる。

肉体の周りに薄く、体内に濃く、まるで衣でも纏うかのように五大の精霊を身に宿す降霊術の一種。

最上位の空から順に、風、火、水、地へと 大地へ向かつて自身を下ろしていく。五行を超えて五大へと至る者。

陰陽の才量を持ち合わせた一颯の、これは修行にも似た戯れなのだ。数分前に、まるで劣等生であるかのようにロジャーに一蹴された人物と同一とは思えないほどに、息をするように精霊を纏う。間違い

なく空崎一颯は降霊科随一の秀才であると言えた。

が、しかし……そんな秀才である所の一颯は先程中庭での試合においてロジャー・ショツクリーに圧倒的な敗北を味合わされた。それは一颯の能力が劣等しているというわけではない、だからと言って逆にロジャー自身の力が一颯を超越しているかといえばそれもまた否だろう。

なぜならば彼は、対人状態で陰陽の技を行使することが出来ないからである。いかに降霊科随一の才の持ち主とはいえ、全くの魔術行使抜きで魔術による強化を施された相手に勝利することは至難。

彼自身、そのことは重々承知の上での決闘試合であった。

陰陽師の家系……、時代とともに廃れゆく旧家に生まれ落ちたのは彼にとつては不運以外のなにものでもなかった。劣化を続ける魔術回路、力と術の後退を空崎の家は認めることができず、結果として家の名を廃れさせない為にとつた手段はショツクリーという外来の魔術師の家系へと才ある子孫を送り込むことだった。

気まぐれに日本の術師を、？珍しい？という些細な事情で迎え入れる提案を出した名家の戯れに、理解と共に息子を売り渡したのだ。

ただ、家の名を消失させない為だけに。

糞喰らえと吐き捨てて一颯の心情もよそに、自身の術を純に保とうとする誇りすらも投げ捨てた単なる古い家を……どうして一颯が好めよう。

それ故に挑み続けるのだ、機会さえあればロジャーに試合を申し込み、長槍による白兵戦を行う。無論、相手は自身の魔術を惜しげもなく行使するが一颯には同様の真似はできず、それ故にステータスの差は歴然と結果に現れる。

憤りも生まれる、しかし陰陽の技を人に向けることがどうしてもできずにいる。……それはとても単純な思考によって生まれた、才ある者故の業ともいえる。

そう、恐怖しているのだ……自身の才を無意識下で理解、把握しているが故に人へ向けてその力を振るうことが恐ろしく躊躇われる。

実際の所は全力で技を行使しようともロジャーが一撃で圧倒され、死に瀕することもない。

そんなことは分かっている、自惚れているわけではない
かし……。

「俺は、どうしたらいいのかな……………」

その昔、幼少の頃に離別した無言の友人に、湖に浮かんだ一颯は語りかける。返事を期待したことなどは一度もない。

しばらく水上で浮遊していた一颯だったが流石に体が冷えて陸へ上がる。

「はつくしゅっ！ うわ、ちよつと浸かりすぎたかもしれん」

両手で体を抱きながら泉のほとりを進んでいると、一颯を待ち構えていたかのように一匹の猫がこちらを見上げている。

「あ？」

『一颯さん、当主様より早急に屋敷へ戻るようにと託かっております』

シヨックリー家が好んで使う伝達用の使い魔だ、猫自身の口元は一切動いていないにも関わらず、曇った使用人の声がこちらへと届く（相変わらず、こう言った類の魔術は慣れ親しまないな……）

猫が喋ったことに一瞬びくついた身体を窘めつつ「はい」とだけ返す。

「今度は一体なんの話だったんだ？」

面倒くさそうに身体をさすりながら一颯は濡れた体で屋敷へと戻っていた。

3

着替えを済ませた後、当主執務室へと一颯は向かう。

呼び出されたのは一颯だけでなく、ロジャーにしても同じことだった。

当主の執務室に並べられた二人を椅子に座ったままのショックリー家当主、アンセルム・ショックリーが重々しくその口を開く。

「急遽二人に集まってもったのは他でもない、急で悪いが君達には日本に向かつてもらいたい」

「日本に？ それは一体どういったことでしょうか、お父様……」

怪訝な表情でアンセルムを見る二人、ロジャーは父からの指令の意図を掴めずに困惑した様子で聞き返す。

「どうということもないが、先日、一颯くんの近況を空崎の家に託していた時のことだ……気になる報告を聞いてね」

「気になる、って……？」

「ソラサキ……お父様に対して、なんだその口の利き方は」

ロジャーは一颯の言葉遣いを叱りつけるように声を荒げる、しかしアンセルムは気にした様子もなく窘め続ける。

「よい、話を続ける……『気になる』というのも、どうも日本の、それも冬木で妙な魔術の痕跡を感知したという報告を受けてな」

「魔術の痕跡……？」

「妙な魔術、それも冬木で……」

ロジャーは何かを察したようにアンセルムに詰め寄る。

「ああ、ロジャーの察しの通りだとは断言できんが、しかし可能性は強い」

誰もが想いを馳せたことがある程の事象である故に想像も容易く、魔術師として根源に至るべきとする名門ら各位にしてみれば、その現象は待ちわびていたにも等しいのだ。

アンセルム、ロジャー共に……その結論へと至った。

「冬木に聖杯が蘇った可能性がある」

それを聞いたロジャーは自身も予想していた事柄とはいえ、事象の大きさに驚嘆の表情を隠せないでいた。

「それは一体、何が原因で………？」

同じく驚いていた一颯がアンセルムに率直な疑問を投げかける。

「それを捜査する為にも君達に日本に、冬木へと向かつて欲しいの

だよ　早急に聖杯の有無を確認、その事象が事実と確認できたのなら私の元へと報告をしてもらいたい」

間髪いれずに畏まったロジャーがそれに答える。

「もちろんです、お父様……それが事実なのであれば聖杯の回収すらも必定の使命、我らシヨックリーの勤めと言えましょう、没落しかけの御三家などは現在の状況に気がついていないかどうかも怪しいところ、となれば仰るとおりに急遽、僕達は冬木へと飛ばなばなりません」

「そうか、頼もしい限りだよ」

満足そうにアンセルムは頷き、手配していた航空チケットを二人に手渡す。

「だ、そうだ　ソラサキ、事は一時を争う急務だ……一刻も早く事の真偽を確認しなければならぬ」

そう使命感に満ち、難題を乗り越える自負すら既に浮かべながら、一颯に視線を向ける。

「一颯くん、是非ともロジャーをよろしく頼むよ、私は君がロジャーの良き補佐になれると信じている」

「お父様、勿体無き言葉ですよ　そうだろうソラサキ」

「……………可能な限り尽力させていただきます」

「ああ、よろしく頼んだよ」

ソラサキごときに頼まれるまでもないといった様子のロジャーを尻目に、一颯は内心喜びを感じていた。

どこまでも上からの視線を向けてくる二人のことなど些細なことであつた。補佐呼ばわり、個人としての自分がシヨックリー家の所有物と化している事実は今更確認する程の事柄ですらない。

その屈辱的な状況下でさえも、いつものように苛立ちを覚えることもなく、一颯は無言でほくそ笑む。

（聖杯　それが噂にたがわない程の事象であるならば、これはまたとないチャンスだ）

彼の喜びも簡単なこと、一颯はこれにより籠から外へ、脱獄の機会

を得たのだ。

居心地の悪い籠からの脱出は一颯にとって未来への分岐点とも言えよう。

彼にとっては明らかなる喜である筈である。

こうして二人は、その日の夜にはもう冬木へと旅立って行ったのであった。

物語は動き出す、奇跡の復活を祝い騒ぎ立てるかの如くに。

喜び勇む青年達も、知り得ぬ力に歓喜する者も、望んだ強欲は動き出し、途方も無き畏怖に苛まれた少女に慈悲もなく、無知に病む少年でさえ逃れようもない……。

彼ら全てが、ここから始まる出会いと別れに、清濁合わせた心情に、応ずる世界の動きはじめに気づきもせず。

ましてや物語が軋む音など、決して聞きようもないのだ。

prologue&episode1(後書き)

できる限り、毎週日曜日の更新を目指して活動していきます。
文章制作には拙い面も多々ありますが、少しでも楽しんでいただければ幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5239ba/>

Fate/Tragic night

2012年1月14日15時48分発行